

ゲーテとイチヨウ

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749 ~ 1832) (図-1) というと、どのような印象を持たれるでしょうか？ 人による好みもあり、また、時代により、興味を持たれたり反発があったり様々であることは、ドイツにおいても日本でも同様であるが、世界的文豪として挙げられる第一のグループに入ることは疑いはない。そのゲーテは



図-1 ゲーテ (1749-1832)
ネット情報による

植物についても多く書き、また、研究も行い、その内容も相当に専門的で、時代を超えて通用する内容を含んでいるが、当人はそれを世間一般に知られていないことを嘆いている。これから、何回かに分けてゲーテと植物について紹介したいのであるが、今回はまず、ゲーテとイチヨウについて述べる。

イチヨウの詩

ゲーテは、イチヨウ (Ginkgo Biloba) という詩を西東詩集 (ゲーテ 1962) に寄せているが、この詩は大変有名であり、それをある集まりで経験した。東京都港区赤坂のドイツ文化会館であったドイツ関係者の集まりでこのことを話題にしたとき、出席していたドイツ大使館の当時の文化部長ケーラー (K.R. Köhler) 博士は、即興で朗々と語るというか、唄われた。ドイツでは詩は声に出してうたうものという伝統があるが、その体現といえるであろう。その邦訳の例を一つ上げる。

いちよう葉

東の邦よりわが庭に移されし	この樹の葉こそは
秘めたる意味を味わわしめて	物識るひとを喜ばす

こは一つの生きてるものの	みずからのうちに分れしか
二つのものを選び合いて	一つのものに見ゆるにや

かかる問いに答えんに ふさえる^{おもい}想念をわれ見いだせり
おんみ感ぜずや わが歌によりて

われの一つにてまた二つになるを

小松健夫訳 ゲーテ西東詩集 (ゲーテ 1962) より

その詩のオリジナルはジュッセルドルフのゲーテ博物館にあり、イチヨウの葉が添えられている (図-2, 長田 2014)。その意とするところは、イチヨウの葉に注目して、心を寄せた背の君と私とは二つに一つであるというものであろう。背の君とは、フランクフルトの銀行家ヨハン・ヤコブ・ヴィレマー (Johann Jacob von Willemer) の若い夫人マリアンネ (Marianne von Willemer) (図-3) である。銀行家はウィーン生まれの歌姫で、舞台女優であり、フランクフルトへやってきた当初は少女を庇護者として一家に受け入れ、後に三度目の妻として迎えたのである。マリアンネは、話題に富み魅力的な女性でゲーテとも密な交流を持った。

そもそも西東詩集とは何であろうか？ 14世紀ペルシャの詩人ハフィス (Mohammed Schepert-di Haftis) の詩ディヴァン (Divan) がドイツ語に訳されて、それを書肆コック社よりもらったゲーテは東洋への思いを込めて創作したもので、その延長上に極東の日本からもたらされたイチヨウがあった。その中にゲーテとマリアンヌの歌の交換の節 (スレイカ) があり、西東詩集の原名 West Östlicher Divan は、その成立がペルシャに関わっていることをある程度反映している。そして、ゲーテは、イチヨウをハイデルベルクの古城址やメイン川の河畔で見て、ヴィレマー家の別

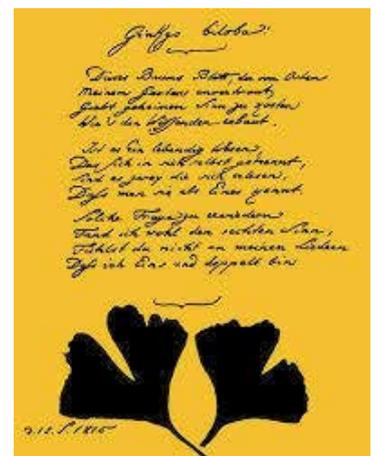


図-2 イチヨウの詩 ジュッセルドルフ ゲーテ博物館蔵 (長田 2014)



図-3 ヴィレマー夫人
ネット情報による

庄へその一枝を持って行ったのである。

ちなみに、イチョウは17世紀末に長崎出島に滞在したオラ

ンダ東インド会社の医官にして博物学者のドイツ人ケンペル(Engelbert Kaempfer)により1712年刊の「廻国奇観」に初めて記載され、彼がオランダ、ドイツへ帰国後、ヨーロッパに広がった。生きていた化石の例として人々の特別な関心を集め、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア、イギリス他へ広がったので、各地に300年余経ていると称されている巨樹がある。また、雌雄性が発見されたのは、到達後100年は経た時点であり、ジュネーブ大学植物学教授デカンドール(A.P. de Candolle)によってであるが、1812年であるので、ゲーテがイチョウをもって訪問した時点の直前であった。ゲーテがこれを知っていたかどうかは明らかではないが、植物情報に敏感な彼のことであるから知っていたということは十分にあり得る。というのも、世界で最も巨大な花であるラフレシア(*Rafflesia*)がインドネシアで発見されたことはその直後に知っていたからである(Schneckenberger 1999)。

そして、ゲーテはマリアンネと詩の交換をしながら、精神の糧にしていたのである。ただ、この時点ではイチョウの生物学的特異性は未だそれほど解明されていたわけではなかった。その後の精子発見などの不思議を知ったら、ゲーテがどのように思うかは興味あるところである。ゲーテにとって、イチョウを持参したフランクフルト訪問などのドイツ南西部の旅行が精神的なリラクゼーションであったとは文学方面でよく言われることであるが、それは二番目のものである。それでは一番目とは何であるかという点、それはワイマール公国の宰相としての10年余にわたる活動に倦んで、イタリアへ逃避したことである。それはいわゆるゲーテのイタリア紀行(ゲーテ 1942)として著されている。その概略に触れてみよう。

イタリア紀行

マイン河畔のフランクフルトで育ったゲーテは、ワイマール公国のアウグスト大公に仕えたが、文豪・詩人としては

なく行政官としてであり、10年余仕えていた。ただし、官吏というより私的顧問官の性格が強く、扱った仕事は外交・財政・軍事から鉱山の経営まで含んでいた。このため、詩作の時間もとれず、密かに悩むこととなったといわれている。1786年8月に大公以下宮廷関係者挙げて、ボヘミアの保養地カールスバードへ出かけたが、この機会にゲーテはそこを早朝密かに抜け出して南へ向かった。ただその逃避は秘書の一人には内緒に告げられており、大公にとりなしてもらい、結果的に1年を超える賜暇(しか)を得るべく配慮されていたので、用意周到であったというべきであろう。バイエルンからチロルを横断し、ブレンナー峠を越えてイタリアへ出かけたのであるが、文人としてではなく無名の一画家としてであった。そこでは、南ヨーロッパの太陽と人々の陽気に癒されたのであり、重い義務からの解放が何にも増しての要求であった。旅行とはいってもその年の秋から冬にかけては4ヶ月をローマで過ごし、かつてのローマ帝国の首都であった面影もなくなっていたローマでもっぱら古代の遺跡と美術館等での古代の作品をたしなんだ。そして、更に南へ向かい、当時はローマより栄えていた、北方の国々に関りの深かったナポリに1か月余過ごし、ローマ時代の遺跡のポンペイも訪れている。更に、船で渡ったシチリアでは、時間をかけてギリシャに遡る古代の遺跡とエトナ火山を間近に見ている。その後、反転して、北上するのであるが、ドイツへの帰途にはローマでは更に10ヶ月かけて古代の遺跡に親しみ、ワイマールへ戻ったのは、1年10ヶ月後であった。

帰国後その旅行を元に「イタリア紀行」を著したのはそれから30年後であるが、その過程で南国の植物に驚き、考察を加えた結果の産物が「植物変形論」であり、「原植物論」であるが、それらの概要は次回の話題としたい。

文献

ゲーテ, J.W. von 1962. 西東詩集, 小牧健夫訳, 岩波文庫

ゲーテ, J.W. von 1942. イタリア紀行(上, 中, 下), 相良守峯訳, 岩波文庫

長田敏行 2014. イチョウの自然誌と文化史, 裳華房(2014)

Schneckenberger, S. 1999. Goethe und die Pflanzenwelt, Palmengarten Frankfurt/Main.